

## 序

慢性腎疾患の診断・治療に関する研究班のグループ研究も開始されて、早や2年が経過した。

この度、各参加施設のレポートをまとめて小冊子とすることが出来たのも、これひとえに本研究班発足のきっかけを作って下さった方々の御盡力、そして協力研究者として参加下さった先生方の御努力によるものと思ひ、まずは紙面を借りて深甚の謝意を表するものである。

学校検尿が制度化されて12年を経過し、その評価も定着しては来たものの、また新たな問題点に直面して来ている。即ち、今回の各施設の報告の中にも数多くみられる如く、早期発見された多数例の中に少からず進行悪化を示す症例が含まれており、その多くを、結局はなすすべもないまま末期腎不全へと至らしめている事実を目の当りにするにつけ、何ともなさげなく歯がゆい思いをすることが多いからである。

凡そ、全ての疾病の管理と治療を理想的に行うというのは、現代の医学と医療のギャップの中にあっては、まず不可能に近いと考えざるを得ないのであって、この辺りがcureよりもcareの時代と言わせるゆえんなのであろう。

かかる点に鑑みて、今回、小児腎臓病、中でも、学校検尿と縁の深い膜性増殖性腎炎とIgA腎症について、小児期発症の疾患特殊性が浮彫りにされ、多面的研究が展開されたのは高く評価される点ではないだろうか。

今後共、小児の腎臓病と学校検尿のきずなについては、ますます新しい観点から調査、研究が進められ、近い将来、必ずや小児腎疾患の予防のうえに、そしてcare system、cure system 確立のうえに役立つ仕事が多量に集積されるものと思われるが、その中であって、本研究班の業績も生かされる時が必ず来るものと確信している。

昭和60年3月1日

北里大学病院腎センターにて

酒 井 糾